

恋愛関係の進展に及ぼす告白の言語的方策の効果

樋口匡貴・磯部真弓・戸塚唯氏・深田博己

Effects of rhetorical tactics in the declaration of love on the development of a romantic relationship

Masataka Higuchi, Mayumi Isobe, Tadashi Tozuka, and Hiromi Fukada

本研究は、恋愛関係における効果的な告白方策としての言語的方策を明らかにすることを第1の目的とし、そうした告白方策の効果に関する状況差を明らかにすることを第2の目的とした。大学生180名に対し、19種類の告白の言語的方策を呈示し、それぞれの告白を受けることによって、相手との関係が進展する程度を尋ねた。また状況要因として、告白者に対する被告白者の好意（片思い、両思い）を操作した。因子分析の結果、恋愛の告白に使用する方策は、“単純型”、“懇願型”、“理屈型”の3種類に整理されることが明らかになった。さらに、2（性別）×2（状況）×3（言語的方策）の3要因の分散分析を行った結果、①両思い状況で告白した方が片思い状況でよりも関係が進展しやすい、②単純型の告白を用いた場合にもっとも関係が進展しやすい、③単純型告白方策の効果の優位性は、状況および性別を問わない、ということが明らかになった。これらの結果が、言語的方策の持つイメージの点から考察された。

キーワード: 恋愛関係, 告白, 言語的方策, 状況

問 題

恋愛関係における告白に関する研究について

多くの青年にとって重要な関心事の1つに、恋愛がある。恋愛とは、性的に魅力を感じる対象に対する肯定的な感情を指し（藤原, 1995）、この感情を主な基盤として成立している対人関係を恋愛関係という。社会心理学における恋愛研究は、対人魅力の延長線上でなされてきた。松井（1990）は、恋愛研究を、①恋愛に対する態度や認知、②異性選択と社会的交換、③恋愛感情と意識、④恋愛の進行と崩壊の4領域に分類している。本研究は、これらの分類領域の中の「恋愛の進行と崩壊」領域に関係しており、特に恋愛の初期段階における告白の問題に焦点を当てる。恋愛行動全体の進展については既に分析が進んでおり、モデルも提唱されている（松井, 1990）。しかし、恋愛関係の開始時に多々みられる「告白」に関する研究はほとんど行われていない。告白は、恋愛関係を開始する上での重要なきっかけであり、その失敗は多くの青少年に深刻な影響をもたらすこともあり得る。そのため、告白に関する研究を行う意義は大きいといえる。

恋愛関係における告白を扱った研究の1つである菅原（2000）は、告白行動の抑制と促進に関わ

る要因を質問紙調査によって検討している。そして、関係形成の期待が促進要因として働き、拒絶される懸念が抑制要因として働くと結論している。

また栗林 (2000) は、大学生を対象に質問紙調査を行い、告白時の状況についての基礎的な特徴を調べた。その結果、告白方法としては、直接対面して行う場合が3分の2を占め、男性は「付き合ってください」という交際の申し込みが多く、女性は「好き」という好意の伝達が多かった。

告白は、まず告白決意の後、告白行動を起こし、告白結果が生じるという一連の過程としてみることができる。このとき、菅原 (2000) の研究は、告白決意から告白行動に至る要因について検討しており、栗林 (2000) の研究は、告白行動に影響を及ぼす様々な状況を調査しているといえるだろう。しかし、告白行動から告白結果に至る過程を扱った先行研究はない。そこで本研究では、この過程を取り上げる。

告白結果に影響を及ぼす要因

栗林 (2000) は、恋愛における告白を、「恋愛関係の形成を目的として、特定の相手に自分の好意を伝達する行為」と定義している。これは、一種の承諾獲得方略といえる。承諾獲得方略とは、「個人が自分の望む行動を他者から引き出す際に用いる言語的影響手段のこと」(深田, 1998)である。告白も、自分の好意を言語的に伝達し、相手に自分の好意を受け入れてもらうことで、相手が自分との恋愛関係を開始してくれることを望んでいる。

今井 (1996) は、18種類の承諾獲得方略を想定しているが、告白にも様々な方策が存在すると考えられる。自分の望む結果を得るためには、どういった方策が効果的かを考え、方策の種類や組み合わせを工夫する必要があるだろう。一般的に、告白結果に影響を及ぼす主要な要因として以下の3つが考えられる。

言語的方策 告白の言葉に関しては、ただ単に「好きです。つきあって下さい」と言うよりも、自分は相手のどんなところが好きなのか、相手が自分にとってどれほど必要なかといったことを伝えた方が、相手の気持ちを動かすためには効果的と思われる。本研究では、上記のような告白の言葉を告白の「言語的方策」と呼び、第1要因として取り上げて検討する。

非言語的要素 相手をじっと見つめたり、真剣な表情をするといった「非言語的要素」も相手に影響を及ぼす手段となり得る。非言語的要素には、おもに、身体動作(身振り、表情、視線など)、空間行動(対人距離、座席行動など)、準言語(声の高さや大きさ、間など)、身体接触がある(深田, 1998)。告白場面において、相手に影響を与えると思われるのは、表情や視線といった身体動作である。しかし、これらの非言語的要素は無意識のうちに生じる傾向が強いため、意図的に操作するのは困難と思われる。そのため、本研究では要因としては取り上げない。

状況 告白結果に影響を及ぼす要因は、「言語的方策」や「非言語的要素」だけではない。その場の雰囲気や文脈などの「状況」も考慮する必要がある。DeVito (1986)によると、状況には3つの次元が存在する。すなわち、社会的-心理的次元(当事者間の地位関係や当事者がおかれている社会の規範や文化的慣習)、時間的次元(コミュニケーションが行われる日時や、一連のコミュニケー

¹ 本研究における「状況」は、場面や文脈といった概念を含んでおり、「コンテキスト」と同じ意味で用いる。

ション事態のどの位置で当該のコミュニケーションが行われるか)、物理的次元(コミュニケーションが生じる場、すなわち有形の具体的環境)の3次元である。本研究では、これら3つの次元のうち、特に重要と思われる社会的-心理的次元を取り上げる。告白における社会-心理的次元には、相手の恋人の有無や相手と自分の関係といったことが含まれるが、本研究では、被告白者の告白者に対する好意の程度(両想いか、片想いか)を取り上げる。

方策効果の測定

方策効果の直接的測定としては「関係変化」を使用し、そうした最終効果の媒介過程として告白の言葉に対する評価的反応を測定する。

関係変化 恋愛における告白は「恋愛関係の形成を目的とし」(栗林, 2000)で行われる。そのため告白後は、当事者間の関係が変わることが多い。告白が受け入れられ、恋人関係になったり、逆に拒絶され、告白前よりも疎遠になったりする。本研究では、方策効果の直接的測定として関係変化を測定する。

評価的反応 告白においては、言葉の表面的な意味だけでなく、その言葉から受けるイメージが関係変化に影響を与えると思われる。例えば、不誠実だと感じられる言葉よりも誠実だと感じられる言葉で告白された方が、心は動かされるだろう。本研究では、こういった告白の言葉に対する評価的反応を方策効果の媒介過程の解明に利用する。

本研究の目的

本研究では、要因として、言語的方策と状況(社会的-心理的次元)を取り上げる。そして効果的な告白方策としての言語的方策を明らかにすることを第1の目的とし、そうした告白方策の効果に関する状況差を明らかにすることを第2の目的とする。

方 法

予備調査: 告白の言語的方策リストの作成

実験で用いる言語的方策は、2つの段階を経て選出・決定された。まず、大学生42名(男性20名、女性22名、平均年齢21.5歳)を対象に質問紙による予備調査を行い、被調査者が過去に実際に用いた、または用いられた告白の言語的方策を収集した。同時に、被調査者が実際に見聞きした周囲の人の告白の言語的方策についても収集した。2名の評定者によって、収集された計149個の告白の言葉をカテゴリーに分類したところ、計24のカテゴリーに分類された。評定者間の一致率を求めたところ71.4%であったが、不一致項目の分類について協議した結果、一致率は94.6%になったため、分類は妥当であると判断した。

次に、得られた24カテゴリーの中から、「恋愛関係の形成を目的として、特定の相手に自分の好意を伝達する行為」(栗林, 2000)という告白の定義にしたがい、「付き合う」ことを前提にしていない5種類のカテゴリーを除外した(例えば、諦めカテゴリー: “今付き合っている子と付き合う前に会っていたら付き合っていたかも”)。そして、各カテゴリーの中で、もっともよく使われている言語表現、またはそのカテゴリーをもっとも代表していると思われる言語表現を選択し、修正が必要な言葉に対しては修正を加え、使用する各カテゴリーに対応した19種類の言語的方策を決定し

た(表1参照)。その際、上述の告白の定義にあわせ、「付き合ってください」という交際申し込みの表現を必ず含めるようにした。なお、これらの手続きは、3名の研究者の協議によって行われた。

実験計画

状況(片思い、両思い)と言語的方策(19種類)の2要因を独立変数とした。状況要因は被験者間要因、言語的方策は被験者内要因であった。

被験者

大学生200名。無記入回答を含まない有効回答者は180名(男性75名、女性104名、不明1名)で、片思い条件91名(男性38名、女性52名、不明1名)、両思い条件89名(男性37名、女性52名)であった。平均年齢は20.8歳($SD=1.72$)であった。

方策効果の測度

言語的方策の効果の測度としては、関係変化および4種類の評価的反応を使用した。関係変化については、告白者とどう付き合うかについて、「付き合いをやめる」(1点)、「今までより疎遠になる」(2点)、「今までと変わらない」(3点)、「今までより親密になる」(4点)、「恋人関係的な付き合いをする」(5点)の5段階で評定させた。また、評価的反応については、研究者3名による協議の結果、告白において重要だと思われる“強引である”、“好感がもてる”、“誠意を感じる”、“心を打たれる”の4種類を用いた。そして、19種類の言語的方策に対して、これら4種類の評価的反応がそれぞれどの程度当てはまるかを「全く当てはまらない」(1点)、「あまり当てはまらない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「やや当てはまる」(4点)、「かなり当てはまる」(5点)の5段階で評定させた。

手続き

質問紙を用いて実験を行った。被験者には直接、または仲介者を通して質問紙を配布し、その場で、または後日回収した。質問紙の構成であるが、まず異性から告白される状況を呈示し、その状況に被験者自身がおかれていると想像させた。ここで、状況(片思い/両思い)の操作が行われた。そして、19種類の言語的方策を呈示し、それぞれの言語的方策について、関係変化および評価的反応について回答させた。また補助的な項目として、被験者自身の恋愛経験を尋ねる項目を設定した。ここでは、①現在恋人がいるか、②(恋人がいないと答えた人に対して)現在好きな人があるか、③告白回数、④被告白回数、の4項目に回答させた。

結 果

告白の言語的方策の構造

19種類の言語的方策の構造を検討するために、19項目の言語的方策に対して、主因子解による因子分析を行った。分析には関係変化得点を使用し、固有値の減少量と因子の解釈可能性を考慮して3因子解を採用した。3因子での回転前累積寄与率は56.0%であった。プロマックス回転後の因子パターン行列、および共通性を表1に、因子間相関行列を表2に示す。

各因子への因子負荷量が.40を下回っていた項目17、18を除外し、各因子の解釈を行った。第1因子は、「好きです。付き合ってください。」や「ずっと好きでした。付き合ってください。」など好意の

表 1 告白の言語的方策に関する因子分析結果（主因子法プロマックス回転後因子パターン行列）

No.	因子名と項目	カテゴリー	因子負荷量			共通性 h^2
			因子 I	因子 II	因子 III	
「単純型」($\alpha = .92$)						
9	好きです。付き合ってください。	好意の伝達・単純	.87	.00	-.03	.74
12	ずっと好きでした。付き合ってください。	好意の伝達・期間	.83	-.06	.08	.72
3	ずっと一緒にいたい。付き合ってください。	願望	.74	.29	-.19	.68
1	気がつけばいつも〇〇さん(君)のことを考えている(の)。付き合ってください。	無意識的存在	.71	-.01	.17	.67
19	大好きです。付き合ってください。	好意の伝達・強調	.66	-.14	.32	.67
4	付き合ってください。	交際申し込み・単純	.60	.16	.03	.52
2	最初は何も思っていなかったんだけど最近には気になる。付き合ってください。	気持ちの変化	.52	.09	.16	.47
6	もしよかったら付き合ってください。	交際申し込み・確認	.47	.12	.23	.51
「懇願型」($\alpha = .84$)						
10	一生のお願いだから付き合ってください。	交際申し込み・懇願	-.10	.78	.16	.68
11	俺(私)は〇〇さん(君)がいないとダメなんだ(ダメなの)。付き合ってください。	相手の必要性	.07	.66	.08	.57
7	俺(私)じゃダメ?	交際申し込み・婉曲的	.24	.59	-.07	.50
8	絶対に幸せにするから。付き合ってください。	交際申し込み・メリット	.26	.48	.10	.53
13	〇〇さん(君)の好きなことを好きになるようにがんばるから、付き合ってください。努力		-.06	.47	.34	.47
「理屈型」($\alpha = .82$)						
14	〇〇さん(君)と話をすることで幸せになる(の)。付き合ってください。	自分の状態	.11	.05	.66	.58
15	俺(私)が秘密を打ち明けたの〇〇さん(君)だけ。付き合ってください。	作戦	-.04	.19	.62	.52
16	最初に会った瞬間に一目惚れした(の)。付き合ってください。	好意の伝達・一目惚れ	.29	.03	.49	.52
5	〇〇さん(君)の笑ったところが好き。付き合ってください。	好意の伝達・相手の魅力	.21	.15	.46	.50
残余項目						
18	誰か好きな人いる?付き合ってください。	好意の伝達・婉曲的	.26	.23	.32	.48
17	〇〇さん(君)のこともっと知りたいし、俺(私)のことも知ってほしいから、付き合ってください。	交際申し込み・理由付け	.28	.21	.17	.32

注1: 因子負荷量が.40以上のものを太字にした。

注2: カテゴリーとは、言語的方策項目決定時における各項目の所属カテゴリー名を示す。

表 2 言語的方策の因子間相関行列

	因子 I	因子 II	因子 III
単純型	1.00		
懇願型	0.54	1.00	
理屈型	0.59	0.56	1.00

伝達を単純に行っている告白が高い負荷量を示したため、「単純型」因子と命名した。第II因子は「一生のお願いだから付き合ってください。」や「俺(私)は〇〇さん(君)がいないとダメなんだ(ダメなの)。付き合ってください。」など相手の必要性を強調したり、交際を懇願している告白が高い負荷量を示したため、「懇願型」因子と命名した。第III因子は、「〇〇さん(君)と話をすることで幸せになる(の)。付き合ってください。」や「俺(私)が秘密を打ち明けたの〇〇さん(君)だけ。付き合ってください。」など、相手といると自分がどんな気持ちになるのかや相手の魅力を説明する告白が高い負荷量を示したため「理屈型」因子と命名した。

さらに、各因子に高い負荷量を示した項目ごとに Cronback の α 係数を算出したところ、第I因子が .92 (8項目)、第II因子が .84 (5項目)、第III因子が .82 (4項目) といずれも高い値を示し、

それぞれの因子の内的整合性が確認された。そこで以降の分析においては、各言語的方策の得点として、表1に示した各因子に高く負荷する項目を加算平均した値を用いることとした。

言語的方策の効果

どの言語的方策が関係進展にもっとも効果的であるかを検討するために、状況、および男女別に関係変化得点の平均値と標準偏差を算出した(表3)。

表3 各言語的方策別の関係変化得点の平均値(標準偏差)

言語的方策 被験者の性	単純型		懇願型		理屈型		全体
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
片思い	3.66 (0.73)	3.41 (0.75)	2.86 (0.72)	2.65 (0.82)	3.24 (0.71)	3.18 (0.77)	3.15 (0.83)
両思い	3.97 (0.54)	4.01 (0.62)	3.15 (0.83)	3.11 (0.90)	3.63 (0.63)	3.60 (0.77)	3.59 (0.82)
全体	3.77 (0.72)		2.95 (0.86)		3.41 (0.76)		

注: 得点が高いほど関係が進展することを示す。

関係変化得点について、2(性別)×2(状況)×3(言語的方策)の3要因の分散分析を行った。その結果、言語的方策の主効果($F(2, 350) = 151.69, p < .001$)と状況の主効果($F(1, 175) = 17.99, p < .001$)は有意であったが、性別の主効果($F(1, 175) = 0.64, n.s.$)は有意ではなかった。また、性別と状況の交互作用($F(1, 175) = 0.88, n.s.$)、性別と言語的方策の交互作用($F(2, 350) = 0.80, n.s.$)、状況と言語的方策の交互作用($F(2, 350) = 0.32, n.s.$)、および、性別、状況、言語的方策の2次の交互作用($F(2, 350) = 1.39, n.s.$)はいずれも有意ではなかった。

言語的方策の主効果について、Ryan法による多重比較を行った結果、いずれの方策間にも有意差が認められ、関係変化得点は単純型がもっとも高く、次いで理屈型、懇願型の順であった($MSe = .20, p < .05$)。

状況の主効果については、両思い条件の方が片思い条件よりも関係変化得点が有意に高く、両思い状況で告白した方が関係は進展しやすいことが示唆された。

言語的方策の特徴

各言語的方策がそれぞれどういったイメージを持つのかについて検討するために、男女別、状況別に4種類の評価的反応得点の平均値と標準偏差を算出した(表4)。さらに、評価次元の尺度基準を統一するため、各評価的反応得点を全体で平均が0、標準偏差が1になるように標準得点に変換した。男女別、状況別に、変換後の評価的反応得点の平均値と標準偏差を表5に示す。また、変換後の評価的反応得点の平均値を男女別に図1、図2に示す。

変換後の各評価的反応得点について、2(性別)×4(評価的反応)×3(言語的方策)の3要因の分散分析を行った。その結果、性別の主効果($F(1, 177) = 7.53, p < .01$)、評価的反応の主効果($F(3, 531) = 31.32, p < .001$)、および、言語的方策の主効果($F(2, 354) = 103.47, p < .001$)が有意であった。さらに、評価的反応と言語的方策の1次の交互作用($F(6, 1062) = 283.27, p < .001$)、および、

表 4 各言語的方策の評価的反應得点の平均値（標準偏差）

言語的方策 被験者の性	単純型		懇願型		理屈型		全体
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
強引	3.07 (0.61)	2.76 (0.64)	3.97 (0.68)	4.01 (0.64)	3.24 (0.76)	3.22 (0.68)	3.37 (0.81)
好感が持てる	3.62 (0.54)	3.50 (0.40)	2.51 (0.74)	2.31 (0.58)	3.16 (0.72)	3.03 (0.65)	3.01 (0.77)
誠意を感じる	3.58 (0.58)	3.41 (0.44)	2.80 (0.80)	2.44 (0.60)	2.96 (0.73)	2.88 (0.61)	3.00 (0.739)
心を打たれる	3.50 (0.68)	3.32 (0.57)	2.58 (0.87)	2.37 (0.68)	3.07 (0.84)	2.99 (0.70)	2.96 (0.82)
全体	3.32 (0.62)		2.86 (0.96)		3.06 (0.71)		

注: 得点が高いほど当該のイメージを感じる程度が高いことを示す。

表 5 各言語的方策の評価的反應得点の標準化変換後の平均値（標準偏差）

言語的方策 被験者の性	単純型		懇願型		理屈型		全体
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
強引	-0.02 ^d (0.76)	-0.41 ^d (0.80)	1.10 ^a (0.84)	1.16 ^a (0.79)	0.20 ^a (0.94)	0.17 ^a (0.85)	0.36 (1.02)
好感が持てる	0.67 ^a (0.67)	0.52 ^a (0.50)	-0.72 ^{cd} (0.92)	-0.97 ^{bd} (0.72)	0.10 ^{ab} (0.89)	-0.07 ^b (0.81)	-0.09 (0.97)
誠意を感じる	0.62 ^{ab} (0.72)	0.41 ^{ab} (0.55)	-0.36 ^b (0.99)	-0.80 ^b (0.75)	-0.15 ^{bd} (0.90)	-0.25 ^{bd} (0.76)	-0.11 (0.91)
心を打たれる	0.52 ^{ac} (0.84)	0.30 ^{ac} (0.71)	-0.63 ^c (1.08)	-0.89 ^{bc} (0.85)	-0.02 ^{abc} (1.05)	-0.12 ^{bc} (0.87)	-0.16 (1.02)
全体	0.31 (0.78)		-0.28 (1.20)		-0.03 (0.89)		

注: 平均値の右肩のアルファベットは、各言語的方策別、および性別における評価反応の多重比較結果を示したものである。アルファベットが同じでない評価反応得点の間に有意差がある ($p < .05$)。

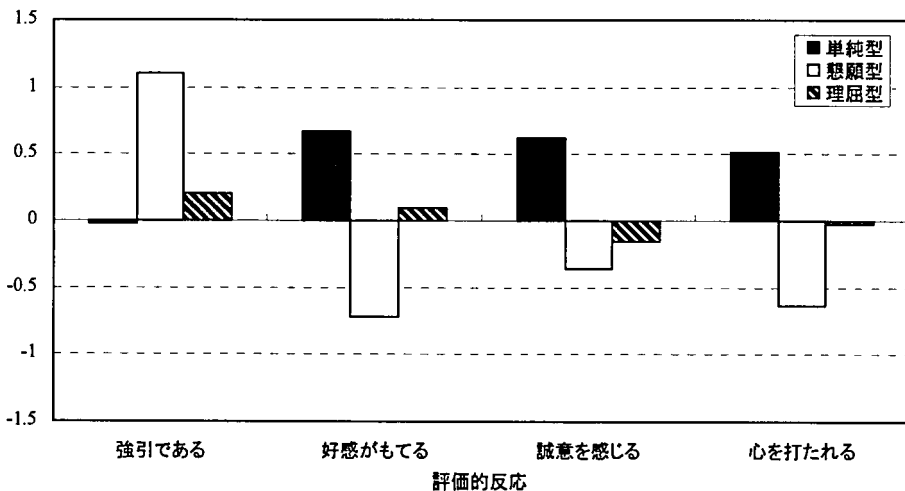


図 1 各評価的反應得点の標準化変換後平均値（男性）

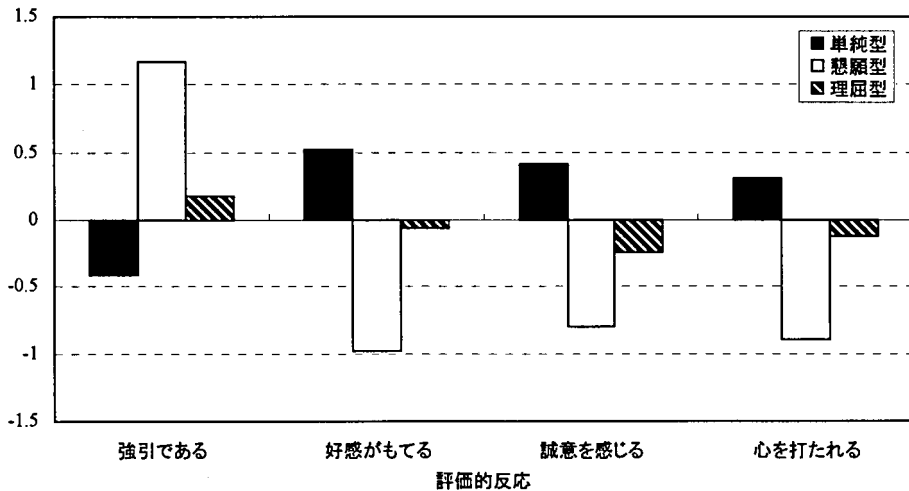


図2 各評価的反応得点の標準化変換後平均値 (女性)

3 要因間の 2 次の交互作用効果 ($F(6, 1062) = 3.85, p < .001$) が有意であった。

2 次の交互作用について、下位検定を行ったところ、性別の単純単純主効果は一部有意であった。単純型においては「強引である」と感じる程度は男性の方が女性よりも高くなっていた ($F(1, 2124) = 9.47, p < .01$)。また、懇願型においては、「好感がもてる」($F(1, 2124) = 4.24, p < .05$)、「誠意を感じる」($F(1, 2124) = 12.85, p < .001$)、「心を打たれる」($F(1, 2124) = 4.40, p < .05$) と感じる程度は男性の方が女性よりも高くなっていた。

言語的方策の単純単純主効果、および、評価的反応の単純単純主効果は全て有意であった (表 5, 図 1, 図 2)。言語的方策の単純単純主効果に関しては、男女とも、単純型においては「好感がもてる」と感じる程度がもっとも高く、「強引である」と感じる程度がもっとも低くなっていた ($MSe = .49, p < .001$) のに対し、懇願型においては、「強引である」と感じる程度がもっとも高く、「好感がもてる」と感じる程度がもっとも低くなっていた ($MSe = .49, p < .001$)。また、理屈型においては、「強引である」と感じる程度がもっとも高く、「誠意を感じる」程度がもっとも低くなっていた ($MSe = .49, p < .001$)。

評価的反応の単純単純主効果に関しては、「強引である」と感じる程度はいずれの方策間にも有意差が認められ、男女とも懇願型がもっとも高く、次いで理屈型、単純型の順であった ($MSe = .35, p < .001$)。「好感がもてる」、「心を打たれる」と感じる程度はいずれの方策間にも有意差が認められ、男女とも単純型がもっとも高く、次いで理屈型、懇願型の順であった ($MSe = .35, p < .001$)。「誠意を感じる」程度に関して、男女とも、単純型がもっとも高くなっていた ($MSe = .35, p < .001$)。

関係変化と評価的反応との関連

関係進展と言語的方策のイメージとの関連を検討するために、3 種類の言語的方策ごとに関係変化得点と各評価的反応得点の相関係数を算出した (表 6)。

単純型に関しては、関係変化と「強引である」との間にはほとんど相関がなかったが、「好感がもてる」との間に比較的強い正の相関が、「誠意を感じる」と「心を打たれる」との間に弱い正の相関

表 6 言語的方策別の関係変化得点と各評価的反応得点との相関係数

	単純型	懇願型	戦略型
強引である	-.07	-.20 ***	-.15 *
好感がもてる	.49 ***	.65 ***	.62 ***
誠意を感じる	.37 ***	.56 ***	.53 ***
心を打たれる	.38 ***	.58 ***	.56 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

が見られた。また、懇願型、および理屈型に関しては、「強引である」との間にはほとんど相関が見られなかったが、「好感がもてる」、「誠意を感じる」、「心を打たれる」と関係変化との間には、比較的強い正の相関が見られた。

また、評価的反応間の相関係数を、言語的方策別に表 7 に示す。単純型、懇願型、理屈型のいずれにおいても、「好感がもてる」、「誠意を感じる」、「心を打たれる」の 3 種類の評価的反応の間に強い正の相関が見られた。上記の 3 種類の評価的反応と「強引である」との間には、弱い負の相関が見られた。「強引である」と感じる告白に対しては、「好感がもてる」、「誠意を感じる」、「心を打たれる」と感じる程度が低いといえる。

表 7 言語的方策別の各評価的反応間の相関係数

	単純型			懇願型			理屈型		
	強引	好感	誠意	強引	好感	誠意	強引	好感	誠意
強引である									
好感がもてる	-.23 **			-.25 ***			-.30 ***		
誠意を感じる	-.11	.78 ***		-.16 *	.78 ***		-.28 ***	.80 ***	
心を打たれる	-.10	.80 ***	.73 ***	-.23 **	.84 ***	.75 ***	-.25 ***	.85 ***	.80 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

次に、言語的方策のどういったイメージが関係進展に影響しているのかを検討するために、関係変化得点を目的変数とし、評価的反応得点（4 種類）を説明変数とするステップワイズ方式の重回帰分析を 3 種類の言語的方策別に行った。

その結果、単純型においては、説明変数として「好感がもてる」が残った ($R^2 = .24$, $F(1, 178) = 55.11$, $p < .001$)。「好感がもてる」と感じる程度が大きいほど関係が進展するといえる。懇願型においては、説明変数として「好感がもてる」と「誠意を感じる」が残った ($R^2 = .43$, $F(2, 177) = 65.92$, $p < .001$) が、「誠意を感じる」による偏回帰係数は有意ではなかった。「好感がもてる」と感じる程度が大きいほど関係が進展するといえる。また、理屈型においては、説明変数として「好感がもてる」が残った ($R^2 = .39$, $F(1, 178) = 112.22$, $p < .001$)。「好感がもてる」と感じる程度が大きいほど関係が進展するといえる。重回帰分析の結果、得られた標準化偏回帰係数および決定係数を図 3~5 に示す。
恋愛経験が関係進展に及ぼす影響

補助的な項目として尋ねた恋人・好きな人の有無、告白・被告回数という恋愛経験が関係進展に及ぼす影響を検討するために、恋愛経験別に見た関係変化得点の平均値と標準偏差を算出した（恋

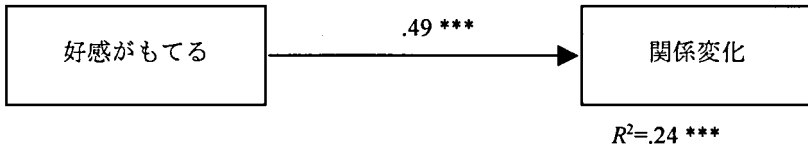


図3 単純型告白方策におけるパス図

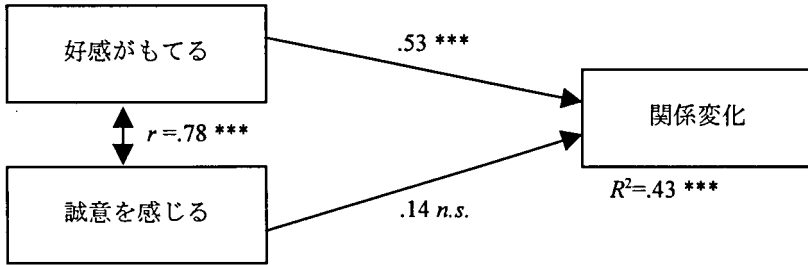


図4 懇願型告白方策におけるパス図

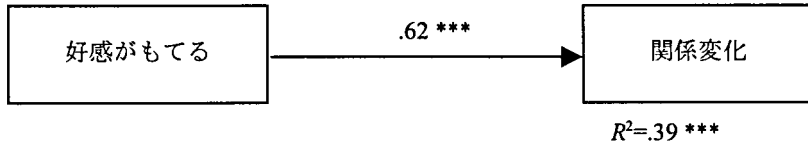


図5 理屈型告白方策におけるパス図

人の有無: 表 8, 好きな人の有無: 表 9, 被告白回数: 表 10, 告白回数: 表 11). 得点が高いほど関係が進展することを示す。

恋人の有無 関係変化得点について, 2 (恋人の有無) × 3 (言語的方策) の 2 要因の分散分析²を行った。その結果, 言語的方策の主効果 ($F(2, 354) = 156.70, p < .001$) のみが有意であった。言語的方策の主効果について, Ryan 法による多重比較を行ったところ, いずれの方策間にも有意差が認められ, 単純型の関係変化得点をもっとも高く, 次いで, 理屈型, 懇願型の順であった ($MSe = .20, p < .001$)。言語的方策の主効果は, 好きな人の有無, 被告白回数, 告白回数を独立変数とする分析でも同様であるので, 以下記述を省略する。

好きな人の有無 関係変化得点について, 2 (好きな人の有無) × 3 (言語的方策) の 2 要因の分散分析を行った。その結果, 好きな人の有無の主効果 ($F(1, 86) = 5.00, p < .05$) と言語的方策の主効果 ($F(2, 172) = 77.62, p < .001$) が有意であった。好きな人がいる人の方がいない人よりも関係変化得点は高くなっていた ($p < .05$)。

² なお, 恋愛経験に関しては, 被験者の人数を考慮した結果, 性別 × 恋愛経験 × 言語的方策の 3 要因の分散分析は不可能であると判断し, 恋愛経験 × 言語的方策の 2 要因の分散分析を行った。

表 8 恋人の有無別の関係変化得点の平均値（標準偏差）

	単純型	懇願型	理屈型	全体
いる(N=90)	3.83 (0.73)	2.96 (0.86)	3.43 (0.81)	3.40 (0.87)
いない(N=89)	3.72 (0.71)	2.90 (0.85)	3.39 (0.71)	3.34 (0.83)
全体(N=179)	3.77 (0.72)	2.93 (0.86)	3.40 (0.76)	

表 9 好きな人の有無別の関係変化得点の平均値（標準偏差）

	単純型	懇願型	理屈型	全体
いる(N=37)	3.90 (0.76)	3.11 (0.93)	3.57 (0.85)	3.53 (0.91)
いない(N=51)	3.57 (0.65)	2.78 (0.75)	3.26 (0.55)	3.20 (0.73)
全体(N=88)	3.71 (0.72)	2.92 (0.85)	3.39 (0.71)	

注: 好きな人の有無は, 現在恋人がいないと答えた人に対してのみ尋ねた. そのため, 分析対象は性別不明者1名を除く88名とした.

表 10 被告白回数別の関係変化得点の平均値（標準偏差）

	単純型	懇願型	理屈型	全体
0回(N=25)	3.78 (0.64)	3.05 (0.78)	3.28 (0.71)	3.37 (0.78)
1~2回(N=63)	3.79 (0.75)	2.88 (0.87)	3.39 (0.79)	3.35 (0.89)
3~4回(N=54)	3.62 (0.75)	2.80 (0.93)	3.36 (0.81)	3.26 (0.90)
5回以上(N=36)	0.96 (0.63)	3.19 (0.68)	3.61 (0.62)	3.58 (0.72)
全体(N=178)	3.77 (0.73)	2.94 (0.86)	3.41 (0.76)	

表 11 告白回数別の関係変化得点の平均値（標準偏差）

	単純型	懇願型	理屈型	全体
0回(N=54)	3.81 (0.68)	2.87 (0.84)	3.38 (0.72)	3.35 (0.84)
1~2回(N=86)	3.75 (0.76)	2.93 (0.90)	3.38 (0.81)	3.35 (0.89)
3~4回(N=29)	3.71 (0.63)	3.08 (0.70)	3.48 (0.66)	3.42 (0.72)
5回以上(N=10)	3.89 (0.84)	2.90 (0.92)	3.58 (0.79)	3.45 (0.96)
全体(N=179)	3.77 (0.72)	2.93 (0.86)	3.41 (0.76)	

被告白回数 関係変化得点について、4 (被告白回数) × 3 (言語的方策) の 2 要因の分散分析を行った。その結果、言語的方策の主効果 ($F(2, 348) = 128.55, p < .001$) のみが有意であった。

告白回数 関係変化得点について、4 (告白回数) × 3 (言語的方策) の 2 要因の分散分析を行った。その結果、言語的方策の主効果 ($F(2, 350) = 88.07, p < .001$) のみが有意であった。

考 察

言語的方策の構造

本研究では、予備調査によって収集した計 149 個の告白の言葉を 24 カテゴリーに分類し、「付き合い」ことを前提としていないカテゴリーを除いた。そして残る 19 カテゴリーから 1 項目ずつ、計 19 項目の告白の言葉を作成し、実験に用いた。そのため、現実場面で用いられている告白の言葉のほとんどを実験で用いたといえる。因子分析の結果、言語的方策として 3 因子が抽出された (“単純型”, “懇願型”, “理屈型”)。このことから、恋愛における告白の言葉は 3 つに分類されるといえるだろう。

また、因子間に比較的強い正の相関が見られ (表 2), 3 方策因子は完全に独立しているとはいえない。これは、本研究の告白の定義に関係していると思われる。本研究では告白の定義を「恋愛関係の形成を目的とし」(栗林, 2000) で行われるものとしており、「付き合い下さい」という交際申し込みを付け加えた告白の言葉を本研究で用いた。しかし、カテゴリー分類の結果、頻度としては少ないが、告白相手に既に恋人がいるなどの事情から、好意の伝達のみを目的としている告白も存在していた (例えば、諦めカテゴリー: “今付き合いしている子と付き合い前に会っていたら付き合いしていたかも”)。“恋人関係になることを目的とした告白”と“好意の伝達のみを目的とした告白”の 2 つを考えた場合、本研究で得られた 3 方策因子は、いずれも前者に当てはまる。そのため、3 方策因子間に強い相関が見られたと思われる。

告白方策の効果

本研究の第 1 の目的は、どういった言語的方策が関係の進展にもっとも効果的であるかを明らかにすることであり、第 2 の目的は、片想い、または両想い状況下で言語的方策の有効性に違いが見られるかを明らかにすることであった。検定の結果、単純型の告白を用いた場合にもっとも関係が進展し、次いで、理屈型、懇願型の順で関係が進展することが示された。これは男女、および、状況に共通した傾向であった。すなわち、片想いか、両想いかという状況に関わらず、男性に対しても、女性に対しても単純型の告白がもっとも効果的であるという結果が得られた (表 3)。この理由として、余計なことを言わないシンプルでストレートな告白は、真実味があり、相手に自分の好意がもっとも伝わりやすいということが考えられる。

また、懇願型の告白を用いた場合、関係変化得点が 2.95 であり、5 段階評定の中点である 3 点を下回っていた (表 3)。これは、懇願型の告白を用いた場合は、その後の関係が告白前よりも進展しにくいということを示している。この理由としては、懇願型の告白には相手の承諾を得るために自分の個性や考え方の一部を犠牲にし、全て相手を優先させるようなニュアンスがあり、そういった告白者の気持ちを被告白者は負担に感じているということが考えられる。

以上を総合的に考えると、あまり重苦しい雰囲気にならないような軽快な告白が、関係を進展させるのにもっとも効果的であるといえる。

言語的方策のイメージ

まず、各言語的方策が持つイメージを単独で検討する。評価的反応得点についての分散分析の結果、単純型の告白に関しては、男女とも「好感がもてる」というイメージがもっとも高く、「強引である」というイメージがもっとも低いという結果が得られた。やはりあっさりとしたシンプルな告白は、被告白者に良い印象を持たれるようである。

一方、懇願型の告白は「強引である」というイメージがもっとも高く、「好感がもてる」というイメージはもっとも低いという単純型とは逆の結果が得られた。相手をお願いしてまで関係を進展させたいという告白者の気持ちが相手には「強引である」と感じられるのではないだろうか。

また、理屈型の告白を見てみると、男女とも「強引である」というイメージがもっとも高く、「誠意を感じる」というイメージがもっとも低い。これは理屈型の告白が、自分の気を引くための「戦略」として、被告白者には捉えられているということを示しているのではないだろうか。「笑ったところが好き」や「話をするだけで幸せになる」といった告白者の甘い言葉を被告白者はどこか信用しきれないのだろう。しかし、「強引である」と感じる程度がもっとも高いことでは共通している懇願型の告白と比較した場合、「好感がもてる」と感じる程度は、懇願型の告白よりも理屈型の告白の方が高くなっている（表4）。このことから理屈型の告白を用いた場合は、懇願型の告白を用いた場合よりも相手に好感を抱かせているといえる。自分の気を引かせる「戦略」だと分かっているものの、相手の甘い言葉にまんざらでもないようである。

男女別では、言語的方策に対するイメージの抱き方がどのように異なるかについてを見てみると、懇願型の告白に対して、男性は女性よりも「好感がもてる」、「誠意を感じる」、「心を打たれる」と感じる程度が高いという結果が得られた。これは、男性は女性に比べて懇願的な告白に良いイメージを持つ傾向があるということを示している。男性は女性の“あなたが全て”的な態度に優越感を抱くのであろうか。しかし、評価的反応得点は、「強引である」を除き、いずれの評価次元においても得点が5段階評定の中点である3点を下回っている（表4）。このことから懇願型の告白が、被告白者に良い印象を持たれる程度は小さいといえるだろう。

次に、言語的方策同士を比較する。「強引である」というイメージは懇願型の告白がもっとも高く、次いで理屈型、単純型の順であったが、その他のイメージはいずれも、単純型の告白がもっとも高く、次いで理屈型、懇願型の順であった。全体的に見ると、単純型の告白がもっとも良いイメージを与えているといえる。「誠意を感じる」というイメージでさえ、懇願型よりも「戦略的」な理屈型の方が高くなっていることを考えると、懇願型の告白はあまり良いイメージを与えないようである。

方策効果の媒介過程

本研究では、方策効果の媒介過程として方策のイメージを設定し、言語的方策のどういったイメージが関係進展にもっとも効果的かを検討した。

重回帰分析の結果から、いずれの言語的方策においても、「好感がもてる」というイメージが、関係進展に効果的であることがわかった。このことは、「好感がもてる」というイメージがもっとも高

い方策である単純型の告白を用いた場合に関係がもっとも進展しやすく、「好感がもてる」というイメージがもっとも低い方策である懇願型の告白を用いた場合は関係がもっとも進展しにくいという結果と一貫する。

以上を総合的に判断すると、言語的方策と関係進展の媒介変数として「好感がもてる」という肯定的なイメージが存在しているといえる。すなわち、被告白者は告白の言葉の表面的な意味だけではなく、その言葉に対して好感がもてるか、そして、その言葉の発話者である告白者に対して好感をもてるかどうかで、告白者との関係を進展させるか否かを判断していると考えられる。

恋愛経験が告白結果に及ぼす影響

本研究では、被験者の恋愛経験を尋ねる項目として、被験者に現在、恋人がいるかどうか、または好きな人がいるかどうか、また、過去の告白・被告白回数の4項目（現在恋人がいると答えた被験者に対しては、好きな人の有無に関する質問を除く3項目）を尋ねた。その結果、現在好きな人がいる人の方が、関係が進展する可能性が高くなっていた（表9）。これは、現在好きな異性がいる人は、質問紙上の告白者と実際に自分が思いを寄せている異性とを重ね合わせ、その異性から告白された場合の期待をあらわしているといえるのではないだろうか。

本研究のまとめ

どういった告白の言葉が関係を進展させるためにもっとも効果的であるかについては、片想いか、両想いかという状況に関わらず、男性に対しても、女性に対しても「好きです。付き合ってください。」といった単純型の告白がもっとも効果的であるという結果が得られた。飾らないシンプルな言葉に相手は心を動かされるようである。

また、告白の言葉のどういったイメージが、関係進展に影響を与えているのかという媒介過程については、「好感がもてる」と感じる告白ほど関係が進展しやすいという結果が得られた。では、どういった特徴を持つ告白に対して被告白者は、好感を抱くのであろうか。ここで、関係進展にもっとも効果的な単純型の告白と、もっとも効果的でない懇願型の告白を比較した場合、「強引である」と感じる程度が2方策間の大きな違いの1つであるといえる。言語的方策のイメージについての分散分析の結果から、「強引である」と感じる程度は、単純型の告白に対してがもっとも低く、懇願型の告白に対してがもっとも高かった（図1、図2）。以上から、「強引である」というイメージと関係の進展には何らかの関係があることが考えられる。「強引である」と関係変化との間にはほとんど相関が見られなかったが（表6）、「強引である」と「好感がもてる」との間にはいずれの言語的方策においても弱いながらも負の相関が見られた（表7）。これは、「強引である」と感じる程度が低い告白ほど「好感がもてる」と感じる程度が高いことを示している。「好感がもてる」というイメージが関係進展に影響しているという重回帰分析の結果、および、「好感がもてる」と「強引である」との間に負の相関が見られたという相関関係の結果を総合的に判断すると、「強引である」と感じる程度が低い告白に対しては、「好感がもてる」と感じる程度が高くなり（相関関係の結果）、「好感がもてる」と感じる程度が高ければ、関係が進展する（重回帰分析の結果）という2段階の因果関係が考えられる。すなわち、告白内容、および告白者に対して好感を抱くかどうかは、その告白を強引であると感じるかかどうかによるのではないだろうか。しかし、本研究の結果だけでは「強引である」

と「好感がもてる」との因果関係を明らかにすることはできず、明確な結論を出すことはできない。

本研究の問題と今後の課題

本研究から、関係を進展させるためにはどういった告白の言葉がもっとも効果的であるのかについては明らかになり、本研究の第1の目的は達成された。しかし、告白の言葉のどういったイメージが関係を進展させるのかという媒介過程は完全には解明されなかった。これは、評価的反応の設定に問題があったためと考えられる。本研究で用いた評価的反応は4種類と少なく、その中で、「好感がもてる」、「誠意を感じる」、「心を打たれる」という3種類の間には強い正の相関が見られた。これは、上記の3種類の評価的反応が同じ次元に属している可能性を示唆している。そのため、関係進展に影響を与えるその他のイメージを見落としている可能性がある。この問題に対する改善点として、用いる評価的反応を増やすことが挙げられる。今後は、方策効果の媒介過程に焦点を当て、被告白者が告白者との関係を進展させる上でもっとも重視するイメージはどういったものかについてさらに検討を加える必要があるだろう。

また、研究をさらに発展させるためには、取り上げる要因を工夫する必要がある。本研究では状況要因として、社会的・心理的次元（片思いか、両思いか）を取り上げた。しかし本研究では取り上げなかった他の状況、特に時間的次元も告白結果に大きな影響を及ぼすと考えられる。DeVito（1986）によると、時間的次元とは「コミュニケーションが行われる日時や、一連のコミュニケーション事態のどの位置で当該のコミュニケーションが行われるか」をあらわす。これを告白場面に即して考えると、告白を行う時期や時間、会話の流れの中でどのように切り出すかということが含まれるだろう。栗林（2000）によると、男性は、4、9月という新学期に多く告白し、女性は2、12月というバレンタインデーやクリスマスといったイベントがある月に多く告白している。時間帯では、夕方から夜にかけて行われることが多い。また、知り合ってから告白するまでの期間も告白結果に重要な影響を及ぼす要因だと思われる。例えば、知り合ってから1ヶ月足らずの相手に「ずっと好きでした。付き合ってください」と告白されるよりも、1年前に知り合った相手から同様の告白をされた方が、被告白者の気持ちは動かされるのではないだろうか。こういった時間的次元を取り入れることで、本研究では生じなかった告白の言葉の効果に関する状況差が生じる可能性がある。

最後に、本研究から関係進展にもっとも効果的な告白の言葉が明らかにされた。これは告白研究における1つの成果といえるだろう。しかし、恋愛における「告白」に関する研究はまだ少ない。今後は多様な側面から告白を捉え、告白にまつわる様々な疑問を明らかにする必要があるだろう。

引用文献

- DeVito, J. A. 1986 *The interpersonal communication book*. 4th ed. New York : Harper & Row.
- 藤原武弘 1995 恋愛 小川一夫（監修）社会心理学用語辞典 北大路書房 p.352.
- 深田博己 1998 インターパーソナル・コミュニケーション 一人対人コミュニケーションの心理学—北大路書房
- 今井芳昭 1996 影響力を解剖する—依頼と説得の心理学— 福村出版
- 栗林克匡 2000 恋愛における告白時の状況に関する研究 日本社会心理学会第41回大会発表論文集,

396-397.

松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.

菅原健介 2000 恋愛における「告白」行動の抑制と促進に関わる要因 —異性不安の心理的メカニズムに関する一考察— 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 230-231.